

はじめに

平成 20 年度に採択された文部科学省の組織的な大学院教育改革推進プログラム「複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム」は、平成 22 年度をもって、一区切りを迎えることになりました。ここで「一区切り」と述べたのは、実質 2 年間半のプログラムにおける大学院教育改革の取組を、ここで終わらせるのではなく、その基本的趣旨を継承して、新たな改革に向かって前進する節目と位置づけたいからです。

私たちは、このプログラムを実践していくため、明治大学に日本古代学教育・研究センターを立ち上げました。そして、このセンターを基礎に、旺盛にプログラムの諸課題に取り組んできました。

本プログラムの特徴を簡潔にいきますと、

- (1) 学際性と国際性を備えた複眼的視野から大学院教育の実質化を実現して、博士・修士号の取得を規定年限に近づけること、
 - (2) 学位取得後のキャリア形成の方途をつくり、日本古代学研究を牽引する専門研究者・文化財調査者等を育成していくこと、
- になります。そのため学際的なプロジェクト型のプログラムを実践し、学際性を国際的視野で学修しようと企画しました。そして、その学問体系を「複眼的日本古代学」と呼ぶことにしました。

プログラムの 2 年半は、まさに「疾風怒濤の時代」と評していいほど、教員集団として、日常的に学際性と国際性を兼ね備えた日本古代学の人材育成に努力してきたつもりです。計画はほぼ順調に進み、博士号の取得やキャリア形成について、基本的には成果があったと思います。ただし、3 年間のプログラム期間で、大学院生の人材育成が終了するわけではありません。個々の院生がどのように成長し、またこれから成長していくのか、この間のプログラムの結果を冷静に総括し、その成果と課題を明らかにして、今後の人材育成に向けて取り組む必要があります。

この取組の全貌は、本報告書には収めきれないほど多量であり、そのため第 2 部の資料編のコンテンツはホームページにリンクするかたちで報告することになりました。したがって、第 1 部「総括報告編」が紙媒体の本報告書、第 2 部「資料編」は目次掲載となり、詳細は電子媒体の掲載（ホームページ）という 2 本立てになります。この両者をもって、正式な取組報告書といたします。そのため、人材育成のプログラムの詳細につきましては、第 2 部の「資料編」を見ていただくことになります。

多数の取組の中でも特に、韓国・中国という東アジアだけではなく、アメリカ・オーストラリアや日本国内に居住している欧米系の研究者の特別講義を実施したことが、人材育成に重要な意味を持ちました。そのなかで大学院生は、国際的な日本

学研究を知るとともに、韓国・中国・アメリカで研究報告を行い、ディスカッションできたことで、国際的視野と感覚を身につけました。蝸壺的な研究姿勢から、世界に大きく羽ばたく研究者のスタイルへと変化しつつあります。

なかでも中間的総括の位置づけで開催した国際学術研究会「交響する古代」（2010年11月4～6日）は、大学院生も「古代学研究の新たな展開」（セッション2）で、外国人研究者の前で積極的に報告し、大きな自信を持つことができました。この国際学術研究会をもとにした研究書『交響する古代 東アジアの中の日本』（東京堂出版）には、残念ながら大学院生の論攷は掲載できませんでした。しかし、研究報告は学位取得に向けた、大きな成果になったと確信します。一方で、この著作は外国人研究者の日本の古代学に対するレベルの高さを如実に示しています。まさに学術の国際性が要請されています。

本GPプログラム事業以外にもこれと密接に関係する学術交流が、(1)北京において中国社会科学院国際合作局と共催して開かれ（2011年3月14・15日）、大学院生も報告しました。また、(2)ソウルで第1回高麗大学校・明治大学国際学術大会が開催され（2011年3月29・30日）、大学院生5名が研究発表を行いました。このように中国・韓国とのネットワークは確実に強化されてきており、大学院生にとって貴重な国際体験の場となりました。今後は、こうした国際的教育・研究環境のなかで、人材育成を努めていく決意を固めています。

本書は、すでに述べましたように、本プログラムの「総括報告編」が中心です。総括の視点は、

- I 趣旨
- II 計画
- III 文部科学省「大学院教育改革支援プログラム委員会」における評価
- IV 実施報告
- V 成果
- VI 評価
- VII 今後の取組

という7区分で記すことにします。このうちIとIIは申請時の趣旨・計画を軸とし、IV以下で実施成果の報告としました。本プログラムには、すでに外部の3氏による第三者評価を行っていますが、VIに掲載しました。

文部科学省からは、プログラム終了後、継続して大学院教育を改革することが求められています。本報告書は、その趣旨にそって成果と課題を明らかにするものであることを、あらためて申し述べておきます。

（取組代表者 吉村武彦）

目 次

第1部 総括報告編	
I 趣旨	3
(1) 大学院教育の実質化	3
(2) 明治大学大学院文学研究科の取組	3
(3) 本プログラムの趣旨	5
(4) 明治大学としての本プログラムの位置付け	9
II 計画	11
III 文部科学省「大学院教育改革支援プログラム委員会」における評価	15
IV 実施報告	16
1. 実施運営体制	16
(1) 取組実施担当者	16
(2) 日本古代学教育・研究センター	18
(3) 研究支援員制度	19
(4) 情報発信	19
2. カリキュラム・プログラム	20
(1) カリキュラム	20
(2) 横断的科目とフィールドプログラム科目	21
(3) 特別講義	31
(4) サブゼミ	33
(5) 学会への院生派遣	34
3. 研究会・シンポジウム	34
(1) 採択記念シンポジウム「日本古代学の新たな地平」	35
(2) 平成20年度大学院教育改革支援プログラム合同フォーラム	35
(3) 国際学術研究会「交響する古代」	36
4. 波及的活動	37
(1) 大阪大学との教育・研究交流会	37
(2) 高麗大学校・慶北大学校との教育・研究交流会	39
(3) 北京大学・中国社会科学院との教育・研究交流	41
5. 総括	43
(1) 学際性	43
(2) 国際性	44
V 成果	46
1. 学位取得者	46
(1) 博士学位	46
(2) 修士学位	48
2. 研究業績リスト	50
(1) 大学院生	50
(2) 研究支援員	64
(3) 教員	70
VI 評価	92
1. 第三者評価	92

2. 自己評価	97
(1) 教育プログラムの実施による大学院教育の改善・充実	97
(2) 教育プログラムの成果と課題	98
(3) 社会への情報提供	99
(4) 留意事項への対応	99
VII 今後の取組	101

第2部 資料編 (添付されたCDから、下記データについて日本古代学教育・研究センター公式サイト
の当該記事にリンクできます。)

I 活動状況

1. シンポジウム
2. フィールドワーク
 - (1) 高麗大学校プログラム
 - (2) 慶北大学校プログラム
 - (3) 東北日本プログラム
 - (4) 南西日本プログラム
 - (5) 南カリフォルニア大学プログラム
3. 国際交流
 - (1) 2008年度
 - (2) 2009年度
 - (3) 2010年度
4. 特別講義
 - (1) 高麗大学校プログラム特別講義
 - (2) 慶北大学校プログラム特別講義
 - (3) 東北日本プログラム特別講義
 - (4) 南西日本プログラム特別講義
 - (5) 南カリフォルニア大学プログラム特別講義
 - (6) 横断的特別講義
5. 研究会・サブゼミ
 - (1) 2008年度
 - (2) 2009年度
 - (3) 2010年度
6. 出版物
 - (1) ニューズレター
 - (2) 紀要『日本古代学』
 - (3) 英文授業テキスト
 - (4) 『交響する古代—東アジアの中の日本—』
 - (5) 『国際学術研究会「交響する古代」予稿集』
7. 学会への院生派遣
 - (1) 2009年度
 - (2) 2010年度

II 【複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム】 関係科目シラバス